



[IMG 4577](#)

新潟県中魚沼郡生まれの佐藤喜作さん(92歳)は1946年1月、弱冠20歳の時、新潟からの第一陣四名の内の一として戦後開拓団に加わり、当時は未だ原野の南伊豆町天神原に来ました。



[IMG 4487](#)



天神原は町の北西、標高約300メートルに位置します。天神原は今、新潟から開拓団としてやってきた人達と最近になって移住してきた人達が混在しています。その他に別荘として普段は留守の家もあります。  
(写真上＝開拓以前から天神社だけはありました。)



[IMG 4583](#)



[IMG 4566](#)

佐藤さんは中学を出て直ぐに川崎市の自動車関連工場に就職しましたが、身体をこわして郷里に戻り結婚しました。農家の三男だった喜作さんは家業を継げず、町役場の人からの「伊豆に良い所があるから行きなさい。」と言う勧めに乗りました。  
(写真上＝現在の天神原)



[沼津大空襲](#)



[竹藪](#)

佐藤さんは新潟から汽車で上野駅経由沼津まで来て、そこから船で西伊豆町仁科まで行きました。戦後まだ焼け野原の沼津は駅から港まで真っすぐ歩けるほどでした。一月だったので本当は寒いはずが新潟から来た佐藤さんは全く寒さを感じませんでした。そしていざ、天神原に着いたらショックを受けました。竹藪だらけで、「こんな所に住めるか！」と思いました。食料を作る仕事と聞いてきたのに畑もなく、最初は土方仕事ばかりで「だまされた」と思いました。米どころ新潟から来た私達は「日本に米が無い場所があるんだ。」と驚きました。

(写真左上＝沼津大空襲、右上＝天神原に生えていたのと同じ女竹)



[IMG 4585](#)



[IMG 4591](#)

まずは近くの長者ヶ原に通い、茅を刈り、その茅で大きな小屋を建てそこに皆が共同で住んでいました。多くの人達が1か月もせず嫌になって出ていってしまいました。なんと言っても水が必要だから深さ20メートルもの井戸を掘りました。

開拓は鍬一本、機械などなかったので全て人力でした。あの頃は、南伊豆の地元の人は「天神原には山賊がいる。」と言っていたそうです。

入植初期の様子を見に来たお父様とお兄様は天神原の酷い生活状況を見て、「喜作を伊豆に流してしまっ。」とおっしゃり、いつも佐藤さんの事を気にかけてくれたそうです。

(写真上は公民館横に建てられた開拓記念碑)



[IMG 4580](#)



[IMG 4564](#)

今は息子さんご夫婦が戻って来られ3人暮らし。息子の喜久男さん(写真左上)は天神原生まれ、小学校は山を南に下って伊浜小学校へ、中学は南東に下って子浦の三浜中学校へ、それぞれ片道一時間以上毎日通ったそうです。お蔭で足腰は鍛えられたとか。

佐藤さんは「来たばかりの頃は本当に大変だったけど、今は極楽です。ここは空気も良いし雪も降らない。戦後南伊豆で一番発展したのは天神原だと思います。もともと何もなかったところですから、今じゃバスも来ます。若い人には本当にお世話になり感謝の一語。」だと。取材の日は高校野球の準決勝、「甲子園の中継を観るのが何よりも楽しみだね。」だとおっしゃいました。

戦後開拓について:

終戦の年、日本政府は深刻な食糧不足と復員者の就労対策として農地の開墾、開拓事業の推進を決定しました。全国で約21万戸が入植、しかし開拓は困難を極め、1969年の事業終了時点で残っているのは9万戸余りと半数を切っていました。

開拓地は傾斜15度以内で50ヘクタールの農地が確保できる場所を機械的に選択したため、気候条件や土壌が劣悪な場所が多くを占めました。静岡県では天神原の他に酪農地として成功した朝霧高原などがありましたが、今は観光地となっている伊東の大室山のようにその多くは撤退を余儀なくされたようです。(ウィキペディアより)

参考文献: ききがきや発行「南伊豆の聞き書き③、知ってんげえ・・・天神原開拓のあしあと」の中の山之内伸仁氏が聞き書きを担当された「故郷を離れ、未開の地へおもむく佐藤喜作(九十歳)」を大変参考にさせて頂きました。

取材: 生きがい特派員賀茂地区担当 福居通彦